

清少納言とはどんな人物かわかりやすく解説 (完全版)

清少納言 (せいしょうなごん) ってどんな人？

教科書に書いてある清少納言

誕生: 康保(こうほう)3(966年)年ごろ

没: 万寿(まんじゅ)2(1025年)年ごろ

歌人(かじん)である清原元輔(きよはらのもとすけ)の娘で、一条天皇(いちじょうてんのう)の中宮(ちゅうぐう)定子(ていし)の女房(にようぼう)。

随筆(ずいひつ)「枕草子(まくらのそうし)」の著者(ちよしゃ)。



清少納言の有名なエピソード

こうろほう ^{みす}
「香炉峰の雪は御簾をかかげて見る」のシーン ★参考資料:「清女褰簾之図」 (1895年)



「清少納言」の読み方は「せい・しょうなごん」が正しい！

「清少納言」というのは、いわゆるニックネームなんだ。
なんで「清少納言」というニックネームになったかを、ひとつずつ説明するね。

まずは「中宮定子の女房」ってどういう意味？

清少納言は、「一条天皇の中宮定子の女房」と書いてあるよね。

【中宮とは】

「中宮」というのは、「天皇の一番目のお妃（きさき）さま」のことだよ。
平安時代では、天皇にはたくさんのお妃さまがいたんだ。

「中宮」は、その中でもトップということだよ。

「定子」というのは、その「中宮」であるお妃さまの名前なんだ。

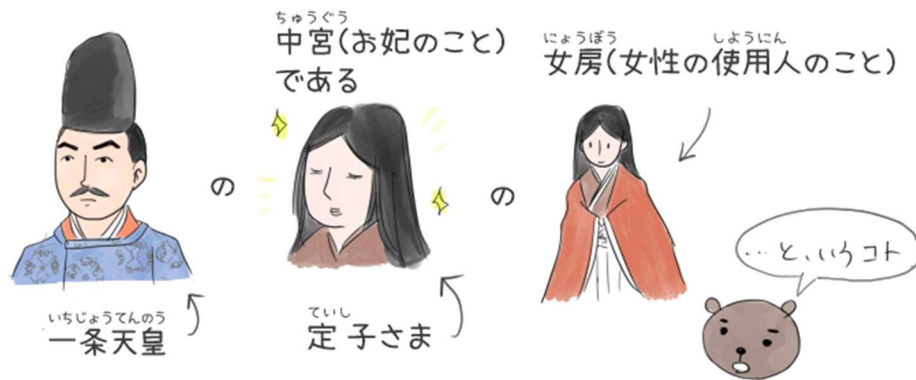
定子は、平安時代に大きな力を持っていた藤原氏「藤原道隆（ふじわらのみちたか）」の娘で、一条天皇のもとへお嫁にいったんだ。

【女房とは】

「女房」というのは、朝廷（ちょうてい）や貴族の家で働く「女性のお手伝いさん」のことだよ。

女房には「自分の部屋（房）」があたえられていたので、「女房」と呼ばれていたよ。





「女房」という職業は、ご主人である上流貴族の女性のお世話はもちろん、話し相手や、家庭教師もしたりをするんだ。だから「美しくて教養（学問の知識があること）がないとなれない」、いわゆるエリート職だったよ。その中でも、「天皇のお妃さまのところで働く房」なんていったら、そりゃあもう超エリート。

女房の本当の名前は秘密！→ニックネームが使われていた

この頃は、女性の本当の名前を公表することは「いけないこと」だったんだ。

だから女房は「ニックネーム」のまま働くんだよ。

ニックネームには、自分の家族の役職の名前などを使うことが多いよ。

清少納言も、兄弟に「少納言（しょうなごん）」（※）になった人がいたんだ。

※誰が小納言だったかは、色々な説があるよ。

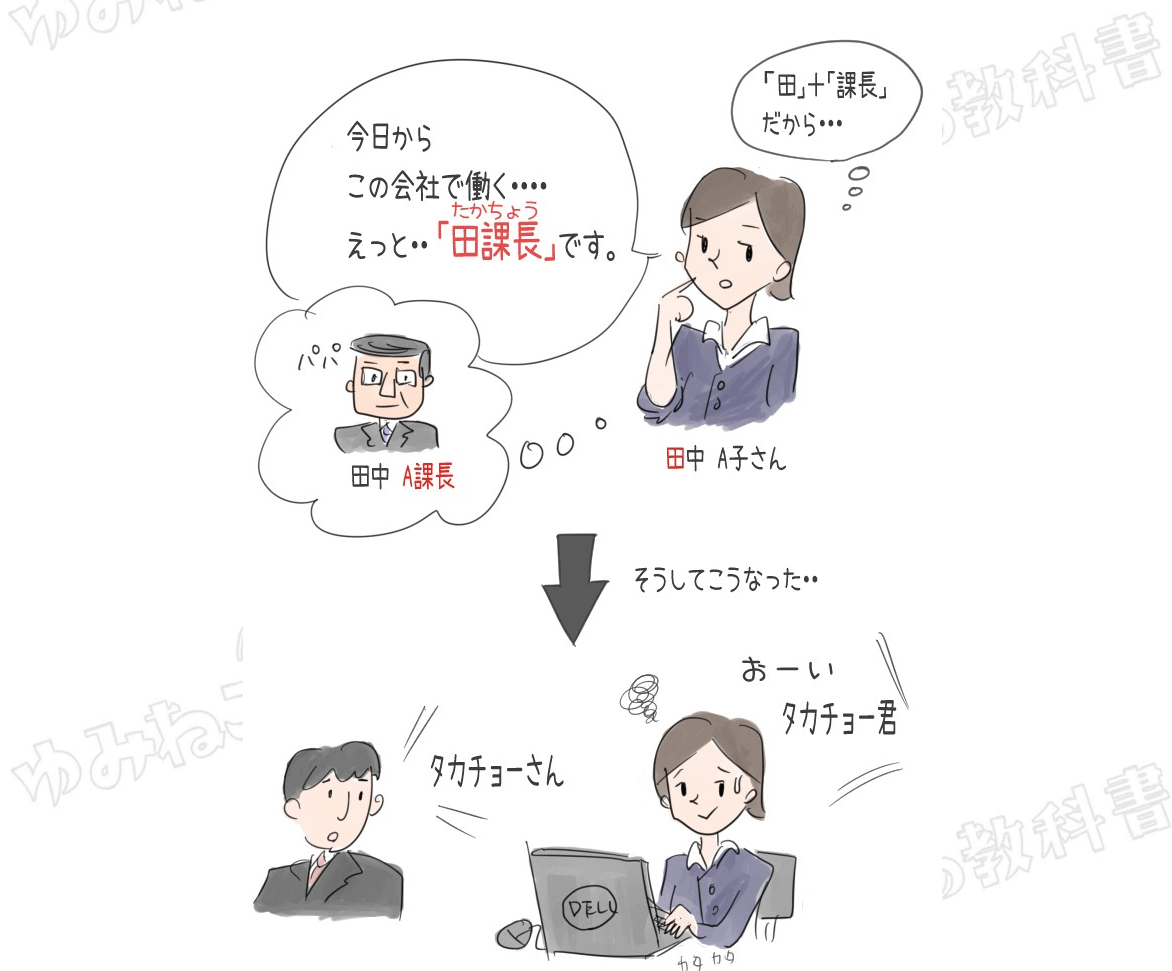
「少納言」というのは朝廷の最高機関（さいこうきかん）である太政官（だじょうかん）の職のうちのひとつ。とても偉い人なんだね。



でも、「身内の役職」だけだと同じニックネームの女房が沢山になってしまうので、ニックネームの頭に、さらに自分の出身の「氏（うじ）の名前」をつけることが多かった。

清少納言のお父さんは清原元輔よね。つまり、「清原氏」の出身。
というわけで、「清」＋「少納言」で「清少納言」の完成！

今で例えると、「田中」さんちの女の子がどこかで働くことになるとして、お父さんが会社の課長だったら、「田課長」って呼んでね、って言う感じかな・・・？



そう考えるとちょっと変な感じだね（笑）。

ちなみに、本当の名前は「清原諾子（きよはらなぎこ）」だったという説があるよ。



清少納言は天才少女だった！

清少納言のお父さん「清原元輔」は有名な歌人。

清少納言も小さい頃から和漢（わかん・日本のことも、中国のことも）の教育を受けたよ。

特に漢詩（かんし）の知識なんかは「誰にも負けない！」と言えるほどのレベルだった。

清少納言の教養がとびぬけていたことが分かるエピソードが「枕草子」に書かれているよ。

ある雪が降った日、中宮定子が
「清少納言、香炉峰（こうろほう）の雪はどう??」と聞くんだ。
これは、唐（とう）の漢詩で、
「香炉峰の雪は御簾（みす）をかかげて見る」
という作品があって、それをナゾかけにしたんだ。

すると清少納言は、中宮定子がこの作品のことを言っているとすぐに理解して、サッと御格子（みこうし）を上げさせて、御簾を巻き上げて、作品と同じように雪景色が見えるようにした。むずかしい漢詩の知識もあって、機転（きてん）がきく（気がきくこと）清少納言に、中宮定子は満足したし、みんなが感心したよ。

紫式部（むらさきしきぶ）の永遠のライバルだった？

清少納言と同じ時代の有名な女性文学作家といえば、「紫式部」だよな。

清少納言と紫式部は「ライバル」だった、というのもよく聞く話じゃないかな？



ライバルと言われる理由①

2人の関係性

2人の関係は実際どんなだったかというと、
清少納言は一条天皇のお妃の定子の女房だよね。
紫式部も、一条天皇のお妃の彰子（しょうし）の女房なんだ。



この時代、天皇にはお嫁さんが何人かいたから、お嫁さんの中でもどれだけ力を持てるか競争していたんだ。

お嫁さんの実家（じっか）がどのくらい力があるかが関係するけど、もちろん「天皇にどれだけ好きになってもらえるか」も重要。

女房はお妃さまの身の回りをお世話したり、家庭教師をしたりするから、

「どれだけ天皇に好きになってもらえる女性になってもらえるか」は女房の腕にかかっていたとも言えるよね。



ライバルと言われる理由②

紫式部の旦那（だんな）さんがらみ

紫式部の旦那さんは藤原宣孝（ふじわらののぶたか）という人なんだけれど、この人のことを清少納言が枕草子で悪口を書いちゃったんだ。

どんなことを書いたのかというと、「藤原宣孝ってば、地味（じみ）なかつこうをして行かなきゃいけない場所にハデハデなかつこうをして行って、みんなに笑われてたよー。」って書いているんだ。

といっても、紫式部と結婚する前のことだから、清少納言が紫式部に対して悪気（わるぎ）があったわけではないんだけどね。

でも紫式部は許せなかったみたい。紫式部は自分の作品の中で、バッチリ清少納言の悪口を書いているよ。

紫式部が書いた日記「紫式部日記」の原文（げんぶん）
（書かれた時のままの状態の文のこと）

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、真名（まな）書き散（ち）らしてはべるほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。かく、人に異ならむと思ひ好める人は、かならず見劣（みおと）りし、行末うたてのみはべれば、艶になりぬる人は、いとすごうすずろなる折も、もののあはれにすすみ、をかしきことも見過ぐさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるにはべるべし。そのあだになりぬる人の果て、いかでかはよくはべらむ。



これを今風（いまふう）の言葉になおしてみるよ。

清少納言っていえば、エラそうに定子に仕（つか）えていた人よね。

「頭がいい」ってカンジで漢字を書きまくってるけど、よく見てみたらバカみたいな間違いもしてるし。

男の人にはあんまり「頭がいい」ってアピールしないほうが絶対いいのに、清少納言は「私なら分かる！」とドヤ顔してるのを見るとムカつく。

自分は「スゴイ」って思ってるのかもしれないけど、そういう人に限ってウソの教養（きょうよう）しかないわよね。

いつもすましていて、あんなペラッペラな態度をとっているような人が、この先いい人生を送れると思う？そんなわけないじゃない。

紫式部は結構言いたいこと言ってるよね（笑）。

でも、実は清少納言と紫式部の2人は、おたがい会ったことはないはずと言われているんだ。

宮中（きゅうちゅう）での女房生活も、タイミングは「入れ違い」だったからね。

じゃあ、会ったこともない清少納言に対してどうしてここまで酷く言うのか？

その理由は、後半でまた説明するよ。

枕草子とは？なぜ枕草子を書いたの？

「枕草子」というタイトルのワケ

「草子（そうし）」というのは、とじてある本、つまり「冊子（さっし）」のことなんだ。

じゃあ「枕」は一体なんのことかというと、

清少納言と定子とのやり取りがキッカケなんだ。



中宮定子の「お気に入り」だった清少納言

中宮定子のお母さんは漢詩の名人だった。

なので、定子も漢文の教養があったんだ。

そんな定子のところに清少納言が女房としてやってくると、なんでも知っている清少納言のことを、定子はとても気に入ったよ。

教養がある者同士、気が合ったんだね。

そんなあるとき、定子のお兄さん藤原伊周（ふじわらのこれちか）が「何も書いてない冊子（本）」を一条天皇と定子にそれぞれ献上（けんじょう・プレゼントのこと）したんだ。

定子「何を書いたらいいかな？」→「枕草子」誕生（たんじょう）！！

当時の紙は貴重品。

定子は、「何を書いたらいいかしら？」と清少納言に相談したんだ。

すると、清少納言は

「『枕』でしょう」

と答えたんだ。

この「枕」の意味は、今でもナゾで、色んな説が考えられているよ。

「枕にしたいくらい分厚（ぶあつ）い冊子だったから」とか、

「枕元に置いて毎日のことを書き忘れないようにする」という意味だったとか…。

他にも、「書を枕にする」という漢詩があるので、その漢詩にひっかけた（つまりシャレ）…とか。

定子はその清少納言の返しが気に入って、「じゃあ、あなたにあげる」と冊子をあげちゃうんだ。

定子も漢詩の知識がある人だから、「書を枕にする」という漢詩にひっかけた、という説だと「なるほど！上手いこと言うわね！」と、冊子をそのまま



あげちゃうのも分かるかもしれないね。

色々説はあるけれど、とにかく「清少納言が「枕」と答えたことをキッカケにもらった冊子に書いた」から、「枕草子」という名前になったんだ。

枕草子には何が書いてあるの？

枕草子の内容とは

平安時代のブロガー清少納言？

枕草子は、全部で約300の章段（しょうだん・ひとまとまりの文章のこと）で書かれているよ。

書かれている内容は、大きく3つのカテゴリーに分けができるんだ。

1. 随想的（ずいそうてき）章段

定子の女房として働きながら、感じたことや思ったことを書いている「随筆（ずいひつ）」的な部分。

随筆とは、見聞したことや思ったことを、気ままに自由な形式で書いた文章や作品のことだよ。

あの有名な「春はあけぼの…」もこの種類に入ると言われているよ。春の美しい夜明けを見て、感じたことを思うままに書いているよね。

2. 類聚的（るいじゅうてき）章段

類聚というのは、「同じようなものを集める」という意味なんだ。

「うつくしきもの、瓜（うり）に描いた子供の顔、雀の子が鼠鳴（ねずみな）き（ネズミの鳴き声をマネして口を鳴らすこと）して呼ぶと踊（おど）るようにして来ること…」とか、

「上品なもの、削り氷にあまずら（シロップ）を入れて、新しい銀のおわん



に盛ったもの」

なんていうように、「〇〇なもの」とテーマを決めて、連想（れんそう）できるものをどんどん書いているよ。色々なものについて書いているので、「ものづくし」とも呼ばれているよ。

3. 日記回想的（かいそうてき）章段

回想（かいそう・思い出）を日記のように書いているものだね。

「定子の女房」として働いている間に見たり聞いたりした、宮中（きゅうちゅう・天皇の家）での出来事や人々の生活について書いた日記的な部分だよ。

特に「中宮定子さまとこんなお話をした！」とか「中宮定子さまが〇〇してくださった！」というように、清少納言が中宮定子のことが大好きで、尊敬していた様子が書かれているよ。

今でも「ブログ」とか「ツイッター」なんかで、「今日はこんなことがあった～」なんてつぶやいてみたり、自分の意見を載せてみたりするよね。こう考えると、清少納言は日本で一番最初のブロガー（ツイ主）なのかもしれないね。

枕草子の裏事情とは実は悲しみを抱えた作品？

枕草子といえば「春はあけぼの…」と素晴らしい景色に感動する気持ちを書いたものや、宮中の出来事を生き生きと書き残している「キラキラ作品」なんてイメージがないかな？

実は、枕草子には悲しい一面があるんだよ。

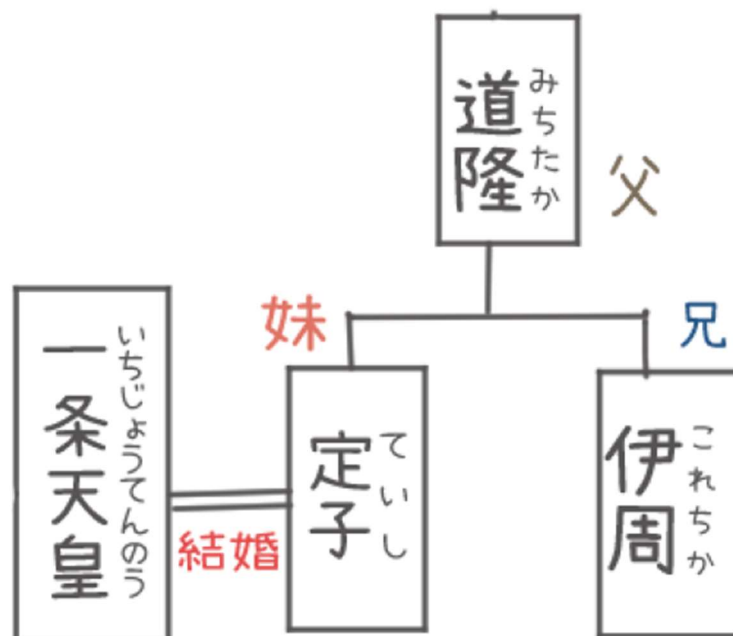


定子の壮絶（そうぜつ）な人生

定子は永祚（えいそ）2（990）年に一条天皇のもとへお妃としてやってきた。

この時代、天皇には何人ものお嫁さんがやってくるのが普通で、そのお妃さまの「実家（じっか）」がどれだけ偉いかで、お妃さまの「宮中での地位」も決まる部分が多かったんだ。

定子のお父さんは平安時代に大きな力を持っていた藤原氏文句なしの家柄（いえがら）だった。



だから定子は「中宮」というお妃の中でもトップの存在だったんだね。

3年後にはお父さんの藤原道隆（ふじわらのみちたか）が関白（かんぱく）になって、さらにその地位は確実なものになっていたよ。

でもその2年後の長徳（ちょうとく）元年（995年）、お父さんの道隆が亡くなってしまうんだ。

道隆のあとは、弟の道兼（みちかね）が関白になったけど、この道兼も次の年に亡くなってしまう。

そしてここで登場するのが藤原道長（ふじわらのみちなが）。



「この世をば 我が世とぞ思う望月（もちづき）の…」で有名なあの人。
そう、あのスーパーセレブの藤原道長。

藤原道長は、定子のお父さんである藤原道隆の弟。

つまり、定子にとっては「おじさん」だね。

その藤原道長がメキメキと力をつけてきたんだ。

反対に、長徳2（996）年、定子のお兄さんの藤原伊周は事件を起こしてしまっ
て、九州の大宰府（だざいふ）へ左遷（させん・出世の反対）させられて
しまうよ。

当時のおまわりさんに捕まえられるお兄さんを目の前で見た定子は、ショッ
クを受けて自分でハサミを持って髪を切って出家（しゅっけ・尼になるこ
と）してしまう。

結局は一条天皇に呼び戻されて宮中に戻ってきたけどね。それほど辛かった
んだね。

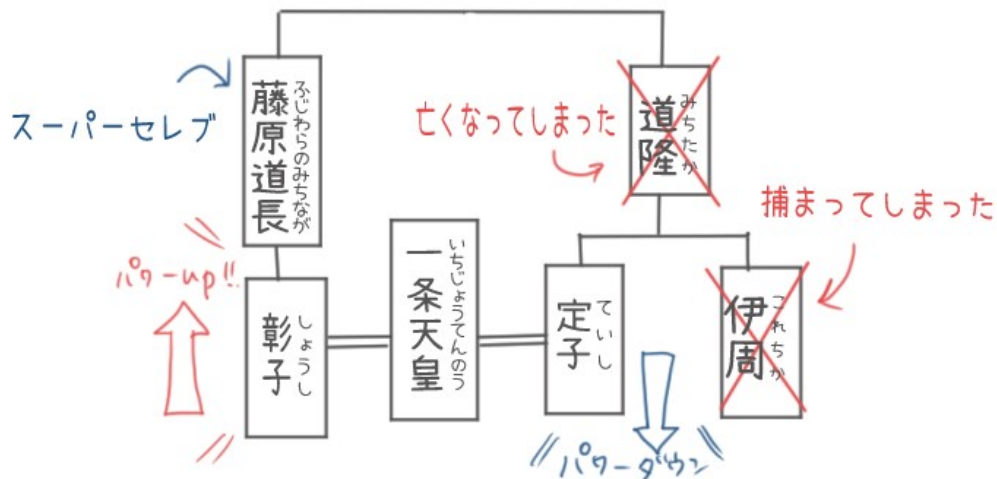
不幸は続いて、長保（ちょうほう）元年（999年）、定子の実家が火事で燃
えてしまう。そしてお母さんが亡くなってしまうんだ。

そこに追い打ちをかけるように、道長が娘の彰子を一条天皇のもとへお嫁入
りさせるんだ。（この頃は入内（じゅだい）と言うよ。）

定子はその後、待望の第一皇子（天皇にとって最初の男の子！）を出産する
んだけど、これに焦（あせ）った藤原道長は彰子を強引に「中宮」という肩
書きにってしまう。

かわりに定子は「皇后（こうごう）」になったけど、結局のところ天皇に
「皇后」が2人いるような状態になってしまった。これは今までなかった前
代未聞なことだったよ。（一帝二后（いちていにごう）というよ。）





定子の宮中での地位はすっかり落ちぶれてしまった。
 そんな中、長保2（1000）年に、二人目の女の子を出産するんだけど、その出産が原因で定子は亡くなってしまおうんだ…。
 定子が亡くなってしまおうと、清少納言も宮中を去っていくよ。

枕草子は、定子の亡くなったあとに書かれていた！

枕草子が書かれていた詳しい時期は色々説があるけど、一部は定子がまだ生きていた頃から書き始められていて、完成したのは定子が亡くなったあとと言われているよ。

でも、枕草子には、定子のお父さんが亡くなったことや、お兄さんの事件、お母さんのこと、定子が亡くなったことも何も書かれていないよね。
 なので、枕草子は「定子が宮中で華やかな生活を送っていた頃」を書くことで、最期悲しいことばかりだった定子の心（または魂）をなぐさめるのが目的だったとも言われているよ。

ここでもういちど紫式部の日記を思い出してみて。
 紫式部は、清少納言のことを「薄っぺらい」と表現していたけど、それは



「あんなに悲しいことだらけだった定子の生活のはずなのに、枕草子には定子の楽しそうな姿しか書かれていない」と納得がいかなかったからかもしれないね。

紫式部は清少納言が宮中を去った5年後くらいに女房としてやってきたので、定子に何が起こったかは全て知っているんだ。

紫式部からすると、ご主人の彰子の他に、天皇から愛されていた定子の存在はやっぱり面白くはないよね。

だから、悲しい目にあって大変だったはずなのに、楽しそうにしている様子しかない枕草子は「無理しちゃって！」という気持ちなのかもしれないね。

枕草子に込められた清少納言の「思い」とは

枕草子は、「華やかな宮中の生活を書いた」ただキラキラした作品なのでは決してなくて、尊敬して愛していた定子のためだけを考えて書かれた、清少納言の強い思いが詰まった作品だと思うんだ。

最期は悲しいことばかりだった定子が、確かに幸せだったころを形に残しておきたいという思いだったのではないかな。

そして、定子の悲しい時期を書かなかった理由はもう一つあると言われているよ。

それは、この枕草子がこの先の時代にも残るために、あえて「藤原道長」のことを悪く書かないようにしたということ。

お兄さんの事件や、彰子の入内、彰子が中宮になったことを書くと、どうしても道長のせいで定子が追い詰められていったことが伝わってしまうからね。

そうすると、大きな力を持った道長に「枕草子」は消されてしまうかもしれない。

定子の幸せだったころを書き集めた大切な「枕草子」を、ずっと残すために考えた清少納言の知恵だったのかもしれないね。

